

小児顎嚢胞の臨床的観察 —成人顎嚢胞との対比において—

華房 英樹, 福田 道男, 細田 超, 瀬上 夏樹, 小若 純久, 畑 毅,
藤村 和磨

最近10年間に当科において、顎骨嚢胞と診断され処置を受けた患者のうち、病理組織学的に検索が可能であった症例について、臨床的に検討した小児の顎骨嚢胞を中心にその概要を報告する。

対象となった顎骨嚢胞全症例数は122例で、その内訳は歯根嚢胞が68例と最も多く、ついで濾胞性歯嚢胞26例であった。その他残存嚢胞、歯原性角化嚢胞、顔裂性嚢胞、術後性上顎嚢胞、外傷性骨嚢胞などがあった。15歳以下の小児の顎骨嚢胞は18例で全体の14.8%を占めた。このうち最も多くみられた嚢胞は濾胞性歯嚢胞の14例で全濾胞性歯嚢胞の過半数を占め本嚢胞の発生年齢の若年傾向がみられた。また残存嚢胞、歯原性角化嚢胞、顔裂性嚢胞、術後性上顎嚢胞は小児例ではみられなかった。(平成元年3月17日採用)

Clinical Observations on Jaw Cysts in Children —Comparison with Adult Jaw Cysts—

Hideki Hanafusa, Michio Fukuda, Masaru Hosoda, Natsuki Segami,
Sumihisa Kowaka, Tsuyoshi Hata and Kazuma Fujimura

A histopathological examination of patients treated for mandibular cyst in our department over the past ten years was carried out, with particular attention to infantile mandibular cysts.

The 122 subjects in this study included 68 with radicular cysts, 26 with follicular cysts, and others with residual cysts, odontogenic kerato cysts, fissural cysts, postoperative maxillary cysts and traumatic bone cysts. Eighteen children, 15 years or younger, had mandibular cysts, making up 14.8% of the total. Among these, the most common form of cyst was the follicular cyst (14 cases). These cases comprised the majority of the total number of follicular dental cysts, emphasizing the tendency of juvenile onset for this type of cyst. Residual cysts, odontogenic kerato cysts, fissural cysts and postoperative maxillary cysts were not observed in children. (Accepted on March 17, 1989) *Kawasaki Igakkaishi* 15(2): 294-300, 1989

Key Words ① Jaw cyst ② Follicular cyst ③ Children

緒 言

口腔領域は全身のなかで嚢胞の発生頻度をもっとも高く、しかも種々の異なった嚢胞がみられる。このうち小児期に発生する嚢胞は、嚢胞が存在する顎骨が幼弱でかつ発育途上にあり、しかも乳歯から永久歯への歯牙の交換期にもあたることから、成人症例とは異なる点が多い。近年、オルソパントモグラフィなどのすぐれたX線装置の普及により以前より多くの顎嚢胞が発見されるようになってきた。

今回、われわれは小児期の顎嚢胞について成人例のそれと比較検討することにより、小児顎嚢胞の臨床病態像について若干の見解を得たので報告する。

対 象

対象は、昭和51年1月より昭和60年7月までの約10年間に、当科において臨床的に顎嚢胞と診断され、さらに手術をおこなった症例のうちで、病理組織学的に検索可能であった122症例である。このうち15歳以下の症例を小児例とし、16歳以上の症例を成人例とした。

結 果

1. 各種顎嚢胞の症例分布

成人、小児の顎嚢胞の合計122例の内訳はTable 1のごとくである。すなわち、歯根嚢胞68例(55.7%)、濾胞性歯嚢胞26例(21.3%)、術後性上顎嚢胞19例(15.6%)、歯原性角化嚢胞4例(3.3%)であり、そのほかに顔裂性嚢胞、残存嚢胞、外傷性骨嚢胞などがみられた。そのうち、小児例は18例であり全体の14.8%を占め、その内訳は歯根嚢胞3例、濾胞性歯嚢胞14例、外傷性骨嚢胞1例であった。成人例では、歯根嚢胞が65例と最も多く、小児例では、濾胞性歯嚢胞が14例と最も多く全濾胞性歯嚢胞の53.8%を占め、他の顎嚢胞に比して小児期の発症例が多かった。また小児例

Table 1. Distribution of patients with various kinds of jaw cysts

	Total case (%)	Children (%)	Children/Total (%)
Radicular cyst	68 (55.7)	3 (16.7)	2.5
Follicular cyst	26 (21.3)	14 (77.8)	11.5
Postoperative maxillary cyst	19 (15.6)	0 (0)	0
Odontogenic kerato cyst	4 (3.3)	0 (0)	0
Fissural cyst	2 (1.6)	0 (0)	0
Residual cyst	1 (0.8)	0 (0)	0
Traumatic bone cyst	2 (1.7)	1 (5.5)	0.8
Total	122 (100)	18 (100)	14.8

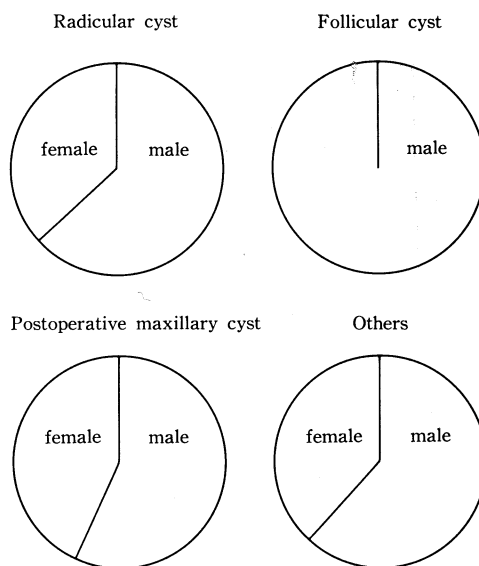


Fig. 1. Distribution of adult jaw cysts classified by sex

では、歯原性角化嚢胞、顔裂性嚢胞、術後性上顎嚢胞はみられなかった。

2. 各種嚢胞の性、年齢別分布

Figures 1, 2のごとく、各種顎骨嚢胞の性差は、成人例においては各嚢胞とも男性に多く、歯根嚢胞では65%、濾胞性歯嚢胞では全例男性であった。小児濾胞性歯嚢胞ではやや男性に多く認められた。年齢別嚢胞発生分布では、成人

例では、30歳台から40歳台に多く発生しており、特に術後性上顎嚢胞は30歳台に多かった。小児では8歳から11歳に多く発生しており、Figure 3のごとくHellmanの歯牙年齢¹⁾で見ると、側方歯群交代第2大臼歯萌出期に相当するⅢB期からⅢC期にかけて66.7%にあたる12例が発症していた。また、小児歯根嚢胞はⅢC期まではみられず、ⅣA期以後に発生して

いた。

3. 嚢胞の発生部位別分類

Figures 4, 5のごとく各種類嚢胞の発生部位は、歯根嚢胞では、成人において上顎前歯部ついで下顎大臼歯部に多く発生していた。また、濾胞性歯嚢胞については成人、小児例とも上顎前歯部と下顎側方歯部から臼歯部にかけて多発していた。

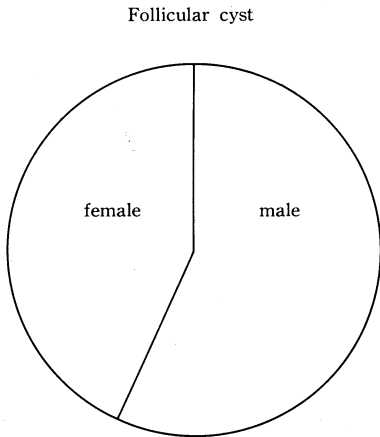


Fig. 2. Distribution of pediatric jaw cysts classified by sex

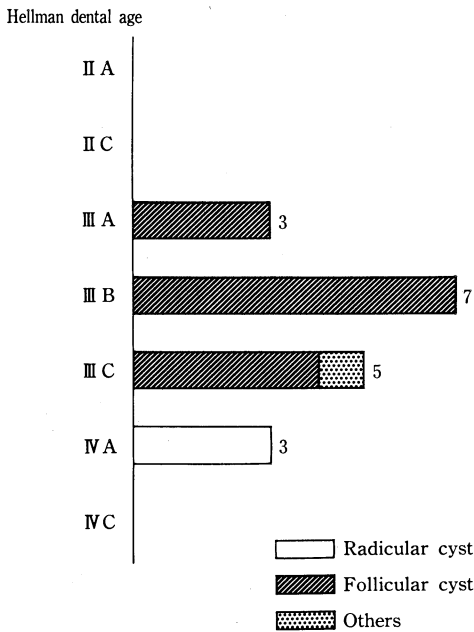


Fig. 3. Number of children with jaw cysts classified by dental age

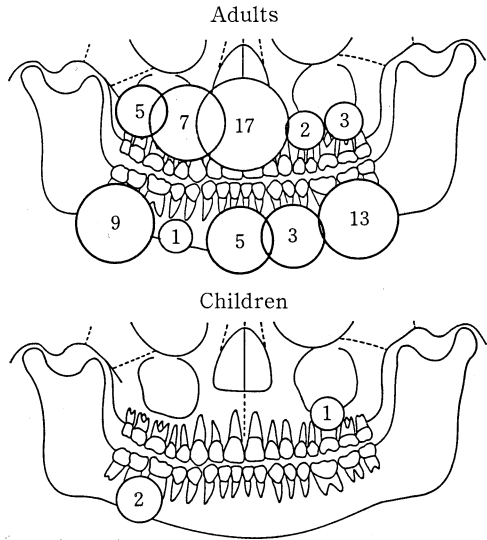


Fig. 4. Distribution of radicular cysts classified by affected sites

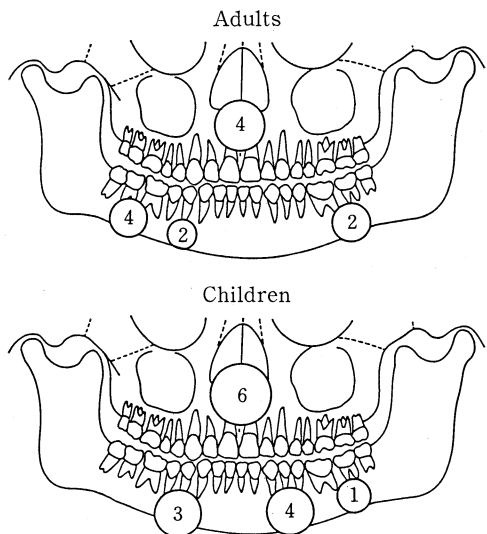


Fig. 5. Distribution of follicular cysts classified by affected sites

4. 嚢胞の原因歯別分布

Figures 6, 7 のごとく、歯根嚢胞および濾胞性嚢胞の原因歯は、すべて永久歯として観察され乳歯では認められなかった。成人歯根嚢胞では、上顎側切歯および下顎第1大臼歯がもっとも多く、小児では3例とも上下顎第1大臼歯が原因歯であった。

濾胞性嚢胞では、成人例では、上顎正中埋

伏過剰歯および下顎の埋伏智歯が多く、小児では、下顎小臼歯および上顎正中埋伏過剰歯に多く認められた。

5. 濾胞性嚢胞の来院理由別分布

Figure 8 のごとく、小児例では局所の無痛性腫脹が57.1%ともっとも多く、ついで歯牙萌出遅延やX線的に偶然発見されるものが多かった。それに対し成人例では嚢胞の二次的感染

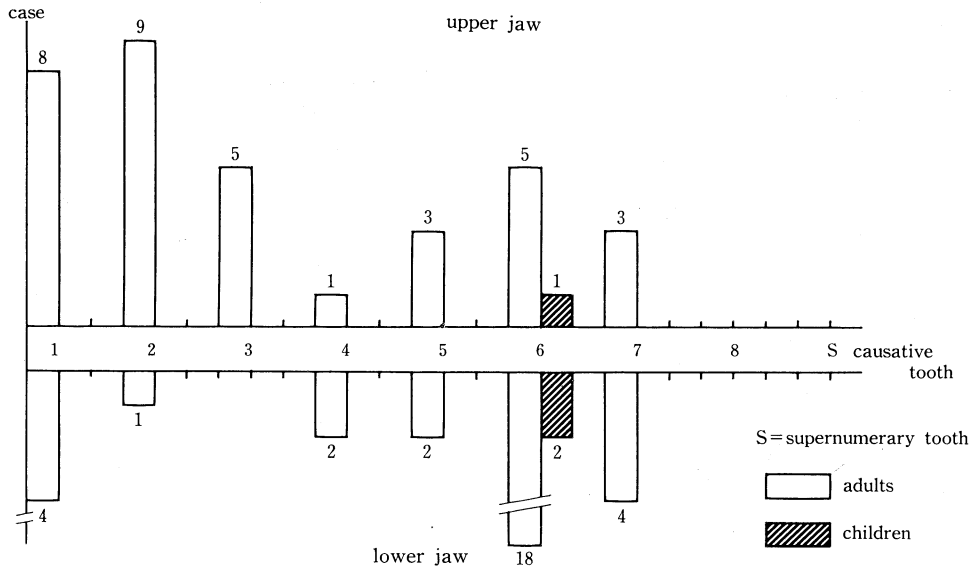


Fig. 6. Classification of radicular cysts classified by causative teeth

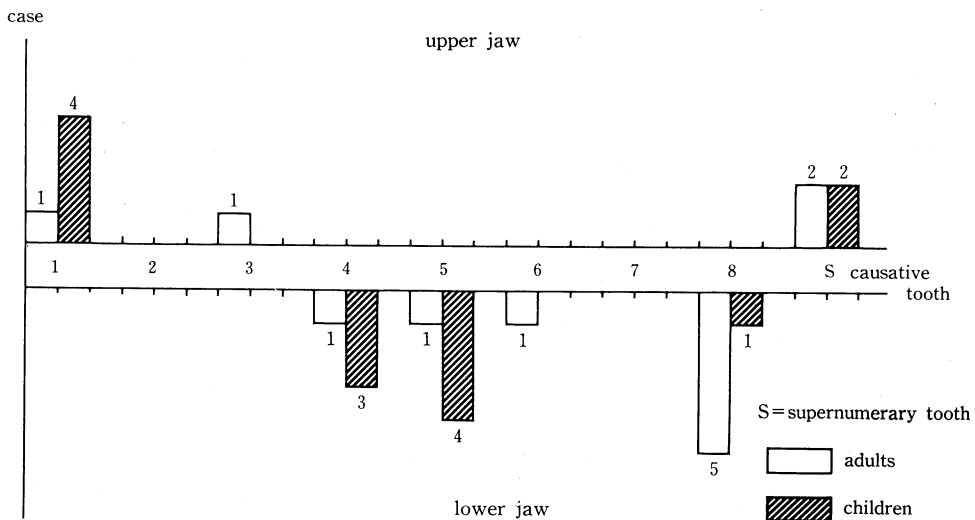


Fig. 7. Classification of follicular cysts classified by causative teeth

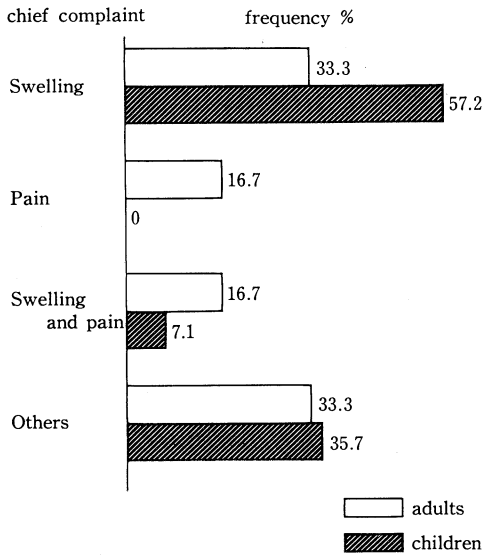


Fig. 8. Distribution of follicular cysts classified by chief complaint

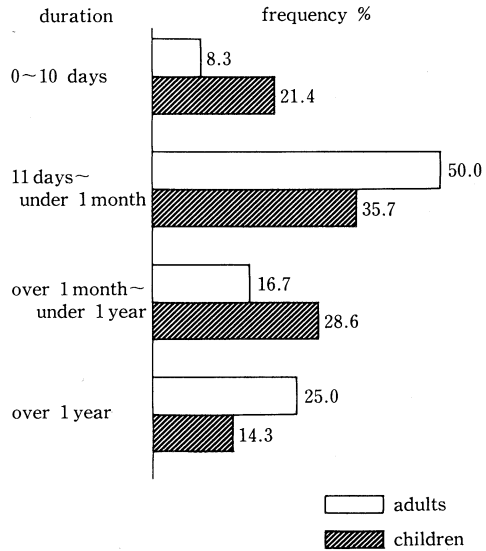


Fig. 9. Duration from the onset of symptoms (follicular cyst) up to the initial examination at our clinic

によると思われる腫脹, 疼痛などの炎症症状を訴えて来院した例が多かった。

6. 濾胞性歯嚢胞の来院時期別分類

Figure 9のごとく, 症状発生から当科初診までの期間は, 小児例も成人例同様11日から1か月で当科初診したものが多かった。

7. 小児顎嚢胞の治療法別分類

Table 2のごとく, 治療としては各嚢胞とも嚢胞全摘一次閉鎖がもっとも多く, 嚢胞全摘副腔形成がそれについていた。副腔形成を行った4例はいずれも下顎小白歯を原因歯とする濾胞性歯嚢胞であり, 原因歯を保存し, 術後全症例とも歯列の正常位へ萌出させ得た。

考 察

顎嚢胞, 特に小児を対象とした統計的報告は少なくわれわれの渉猟し得た限りでは立花ら²⁾の報告を含め若干の症例報告³⁾⁻⁸⁾をみるにすぎない。

各嚢胞の発現頻度についてみると, 成人例では歯根嚢胞が最も多く, 小児例では他報告²⁾同

Table 2. Pediatric cysts classified by therapeutic methods

Treatment \ Variety	Radicular cyst	Follicular cyst	Others	Total
Partsch's second method	3	10	1	14
Partsch's first method	0	4	0	4
Marsupialization	0	0	0	0
Total	3	14	1	18

様に濾胞性歯嚢胞が大部分を占めていた。濾胞性歯嚢胞の発現頻度をみると Shear⁹⁾は顎骨嚢胞750例中103例(13.7%), Fickling¹⁰⁾は336例中67例(19.9%)と報告し, 本邦においては術後性上顎嚢胞を含んでいるため多少異なるが, 伊藤ら¹¹⁾は665例中93例(13.9%), 齊藤ら³⁾は197例中29例(14.7%)とし, 立花ら²⁾は, 389例中55例(14.1%)とし, このうち小児例が全症例中の50.9%を占めていたとしている。これは, われわれの結果とほぼ同様のものであった。

以下, 小児例の大部分を占める濾胞性歯嚢胞

につき成人例と比較検討した。

性別についてみると、男女比は、立花ら²⁾が小児例で20:8、成人例で18:9といずれも男性に多いと報告しているがわれわれの症例でも成人例は男性に多く出現していたが、小児例では性差は認めなかった。しかし、Shear,⁹⁾ Killey,¹²⁾ 伊藤ら¹¹⁾も男性に多く発現していると報告している。

年齢別にみると本嚢胞の好発年齢としては10~30歳台といわれている。¹³⁾ われわれの症例では、小児例では8~9歳に最も多く、成人例では40~49歳に最も多かった。これは、立花ら²⁾の、小児例では10~11歳、成人例では20~29歳の二つのピークをもつタイプと似ているが、成人例のピークにおいてわれわれの症例は高い年齢層を示した。

本嚢胞の原因埋伏歯は、下顎第3大臼歯、下顎第2小臼歯に多いとされ、Dachiら¹⁴⁾は、下顎第3大臼歯が37%、上顎第3大臼歯が15%と報告している。われわれの26例中では、下顎第2小臼歯10例、下顎第3大臼歯7例、上顎正中過剰歯7例の順に多く、若干の相違があ

る。また、山中ら¹⁵⁾は乳歯が濾胞性嚢胞の原因歯と考えた1例を報告しているが、われわれの症例では認められなかった。一方、成人例と小児例との比較において、前者では下顎第3大臼歯、後者では下顎第2小臼歯に好発しており、立花ら²⁾の報告とは多少異なっていた。

初診時病態についてみると、小児例では発生部位の無痛性の腫脹が最も多く(33.7%)次に二次感染を伴うためか疼痛、または疼痛に腫脹を伴うものが多かった。

本嚢胞の治療法としての、開窓療法は多数報告されている。^{5),7),16)~19)} われわれの症例では、14例中10例が嚢胞全摘、一次閉鎖されており、4例が開窓療法が行われた。そして、いずれも埋伏歯を保存し、術後全症例歯列の正常位へ萌出させることができた。このように少数例ではあるが埋伏永久歯を萌出させ保存できる点では優れた治療法であると考えられる。しかし埋伏歯の性状、解剖学的位置、患者の年齢、骨質の状態、嚢胞の性状など種々の因子により正常萌出が困難な症例もあり、今後の研究が待たれる。

文 献

- 1) 榎 恵：歯科矯正学。第2版。東京、医歯薬出版。1981、p. 55
- 2) 立花忠夫、清水正嗣、塩田重利：小児顎骨嚢胞の臨床的観察—特に濾胞性嚢胞について—。日口腔外会誌 26: 337—344, 1980
- 3) 斎藤幸一、四条誠一、朝波惣一郎、中村保夫：過去5年間における口腔領域嚢胞性疾患の臨床統計的観察。日口腔外会誌 19: 353—356, 1973
- 4) 守谷友一、田代直也、関川和男、高橋善男、山田和祐、藤田 靖、岡辺治男、山本 肇：最近5年間の顎骨嚢胞に関する臨床統計的観察—特に原始性嚢胞の鑑別診断について—。日口腔外会誌 27: 931—939, 1981
- 5) 西嶋克己、森田知生、桜井 洋、高梨吉郎、福島範明、池田 剛、岸 幹二、平岡正隆、木口健一郎：小児顎部嚢胞性疾患について試みた開窓術。小児歯誌 4: 84—89, 1966
- 6) 阪 初彦：(2)小児の濾胞性嚢胞について。日歯評論 340: 154—162, 1971
- 7) 清水正嗣、尾島富貴子、鳥 愛子、塩沢時子：小児下顎嚢胞の開窓療法後、X線学的に治癒を認めた1例。歯放線 14: 67—72, 1974
- 8) 深田英朗：小児歯科ノート。東京、金原出版。1969、p. 115
- 9) Shear, M.: Cysts of the oral regions. Bristol, John Wright & Sons Ltd. 1976, p. 6
- 10) Fickling, B.W.: Cysts of the jaws. A long term survey of types and treatment. Proc. r. Soc. Med. 58: 847, 1965
- 11) 伊藤秀夫ほか：顎骨嚢胞の臨床統計的検討(主として歯根嚢胞および濾胞性嚢胞について)(抄)。日

- 口腔科会誌 18 : 241, 1969
- 12) Killey, H. C. and Kay, L. W.: Benign cystic lesions of the jaws, their diagnosis and treatment. Edinburgh & London, E & S. Livingstone Ltd. 1966, p. 125
 - 13) 石川梧朗, 秋吉正豊: 口腔病理学Ⅱ. 東京, 永末書店. 1982, p. 373
 - 14) Dachi, S.F. and Howell, F.V.: A survey of 3,875 routine full-mouth radiographs. II. A study of impacted teeth. Oral Surg. 14 : 1165—1169, 1961
 - 15) 山中俊彦, 沢熊芳生, 若江秀敏, 豊嶋昭治, 富岡徳也: 乳歯に起因すると思われる濾胞性歯嚢胞の1例. 日口腔外会誌 23 : 370—374, 1977
 - 16) 小幡幸男: 歯科臨床技術講座, 外科編. 今田見信編: 顎骨嚢胞の開窓法. 東京, 医歯薬出版. 1967, pp. 181—190
 - 17) Shafer, W. G., Hine, M. K. and Levy, B. M.: A textbook of oral pathology. 4th ed. Philadelphia, W. B. Saunders Co. 1983, p. 264
 - 18) 久野吉雄, 道健一, 佐々木次郎, 金子賢司: 今日の歯科医療 口腔外科的疾患治療の指針. 第1版. 東京, 書林. 1982, p. 210
 - 19) Wine, W. M., Welch, J. T. and Graves, R. W.: Marsupialization of a dentigerous cyst of the mandible: Report of case. J. oral Surg. 29 : 742—745, 1971